

生きるってのが好き。

ピアニスト 田崎 悦子さん

ピアニスト

こんなにも近寄りがたい職業の人はいないと思ってました。
繊細で激しくて孤高の人。そんなイメージを持って、
田崎悦子さんにお話を伺って、先入観を恥じました。
決めつけた正解を持っていてはつまらないのです。
どんなことなのか田崎マジックが目を開かせてくれます。

ホッとらいふ
インタビュー



特集 1



散歩の途中で立ち話。言語の達人も「山梨弁だけは難しくてしゃべれない」のだとか。

「曲に好かれていない」といついふか

この秋から、田崎悦子さんは6回シリーズの大きかりなコンサートを開く。“田崎悦子ピアノ大全集”と名づけられたこのコンサートでは、田崎さん自身が選りすぐったバッハから現代音楽に至る名曲19曲を演奏する。

「タイトルでは“全集”としていますが、バッハから現代に生きる作曲家たちまでのすばらしい作品を“つまみ食い”したコンサートなんです。選曲はあくまでも私の好みで、バロックから古典、ド

イツロマン、ショパン、リスト、そして19世紀から20世紀に変わるあたり、音楽的にも興味深い時期のカラフルな作品も入っています。自分の中ではモーツァルトもバッハもショパンもドビュッシーもとても好きで、そのとき弾いている曲それぞれにもすごく没頭しちゃうものですから、そういうのめりこんでしまった曲がこれまでの人生にずらっと並んでいるわけ。そんな曲を集めた“大全集”な

んです。ピアニストたちはよくオール・ペーター・ペンとかオール・モーツァルトという演奏会をやっています。オールにするためには実を言えば好きじゃない曲も弾かなきゃならないわけです。この“好きじゃない”も、私は“曲に好かれていない”って言うんですけど。そんな曲までひっくりかえして弾くこともないし、私にできること何かって考えたら、つまみ食いになったというわけです」

「のめりこんでしまった」という曲を改めて弾くとすると、どんな想いがあるのだろうか。

「今までもそうですが、何度弾いても一回一回全く新しい気持ちで曲に向き合っています。古い引き出しを開けて出すということはしません。もっとカラフルにもっと深く、というふうに弾く。新たな発見へどんどん頭が行くので、とても贅沢な感じがします。音を弾くという行為を自分の中で熟させて自分の声として発するということ



南アルプスの山々が美しいバルコニーからの眺め。

ころまで、若いときはなかなか行けない。生きてきて、自然と自分の中から出てくるというのが理想的ですが、それに少しは近づけたかなって気がします。私の大好きな演奏家にアニー・フィッシャーというピアニストがいます。生きているにおいがぶんぶんするようなそんな野生的な演奏をするピアニストです。ある新聞の批評にこう書いてありました。アニーの演奏にはいつもクエスチョンマークがあるって。絶対にこれが正解だっというフタがない。だから新鮮なんだって。普通の音楽家は皆これだっという正解を弾いているような気がする。彼女は正解を持っていないって。こういう演奏家になりたいって思いました」

今いるところを好きになる

高根町の家は田崎さんにとってのリビングだという。演奏会などで出かけることが多く、ここに

ることはめったにないものの、一番落ち着ける場所なのだろう。

「東京出身なんですけど、狭くてやかましい感じがして、東京にはとてもじゃないけど住めな思いました。たまたま私の実家で山梨に山の家を持っていたので、日本を離れていた30年の間、一時帰国するたびにその家を使っていたんです。木々の緑や土の香り、周りに住んでいる人々の素朴さが好きなんです。土地勘のあるこの辺りで探しはじめて、この土地に出会ったときに一瞬でわかったの。あ、ここがそうだって。何にでも出会いがあり、それを大事にしないと。求めよさらば与えられん、という言葉どおり、求めていけば必ずどこからか降ってくるのよ。すべてが出会いです。これまでも人生のスケジュールを決めたことはなかったの」

10代で単身ニューヨークへ渡り、演奏活動で世界中飛び回る日々を続けてきた。どこの国へ行ってもホームシックにならないし、食べ物合わないなんてことも全くな



「ピアノの前にいるより台所に立っている時間のほうが長いかも」と笑う田崎さん。ご主人と朝食を。

い。

「私はカメレオンみたいなもの。訪れた土地の人間にすぐになれちゃう。3日もいると、その言葉がうつつちやうんです。上から下まで全身空っぽだからかしら。戸を閉めちゃうことなんてない。食べ物だって、その土地のものは何でも食べます。ニューヨークで食べなかつた和食も、日本ではそればかり。山梨ではこの辺りの野菜をたつぷり使って料理をします。料理するのも食べるのも大好き。なんかね、生きることのすべてが好きなの。衣食住のすべてがね。それに私は今いるところを好きになるんです。海外生活の長かった友人が、日本人の性格と合わない、あなたはよく日本に住んでいられるわねとこぼしていたけれど、私、日本人の性格はこう、なんて決め込んだことないもん、って答えた。どこの国の人間だって人によって全然違うじゃない」

〇〇はこうだとか、どうしても人は決めつけたがる。そしてそれになんじがらめになつてしまう。



住まいの設計は田崎さんのアイデアから。暖炉と開伊裏とピアノのある広いリビングルーム。

でも、田崎さんはそうではない。

「嫌なところにはいないとか、嫌な人とは話をしないとかが、無意識のうちに避けているんでしょ。でもね、音楽だけは違うの。音楽だけは一つの部分がでるまで絶対にやるから逃げない。自分が考える理想の結果が欲しいからやるし、あきらめません。ある、できるということがまず前提。これが私の生き方かもしれない」

表現者にとって大事なのは

田崎さんが音楽監督を務める「Joy Of Music」には、ピアニストを目指す子どもたちが集まる。清里高原ハイランドホテルをはじめ各地で開かれるピアノセミナーは単なるレッスンではなかった。

「今回は農業体験もしてみました。葱を皆で植えたのよね。土をいじってって感覚がわかるでしょ。だって今の子は、そよ風が頬に当たるような感じ、かぐわしい香りが深ってくるような感じ、そういう感じで弾けて言ってもわからないう感じですよ。子どもたちの感覚が閉ざされていることに気づいたの。自然の中で土に触れたり、風のおいを嗅いだりってということが、表現する人間にとってどんなに大事かということ。食べる感覚も大事で、お米の一粒一粒に味わいが感じられるように、音の一つ一つにも味わいがあるはずなんです。セミナーの1週間で子どもたちは変わってしまうの。なんでこ

うなるの？ってというのがこの講座の秘密。今の子は物質的には非常に恵まれているけど、音楽的には恵まれているとは全く思わない。ニューヨークで私は素晴らしい巨匠たちに出会い、音楽的にも人間的にも豊かでした。それを後進へ譲らないと損でしょ」

田崎さんは、音楽家として以前に人として「ねえ、こんなに素晴らしいことなのよ、生きているってことは」と教えてくれる。母性的な愛よりもずっと大きい根源的な愛を持つ人だった。

56

田崎 悦子 (たざき・えつこ) さん

日本が世界に誇る北杜市高根町在住の国際的ピアニスト。フルブライト・スカラーシップを得てニューヨークのジュリアード音楽院に留学。卒業後はニューヨークにとどまり、世界中に活躍の場を広げていった。アメリカ建国200年祭では、アメリカを代表する10人のピアニストに選ばれる。圧倒的かつ繊細な表現力は各方面から高い評価を受けている。これまでにショルティ、小澤征爾をはじめとする世界第一線級の指揮者と数多く共演。現在、桐朋学園大学特任教授。「感動する音楽」を聴衆と音楽家が共に力を合わせて育むピアノセミナー「Joy of Music」 in 八ヶ岳>主宰。



撮影 (3~6ページ) 後藤善昭、(7ページ) 八木光裕